

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第129集

大平遺跡Ⅱ

平成12年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

【正誤表】

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第129集
大平遺跡Ⅱ

下記の箇所の訂正をお願い致します。

記

9頁 下から8行と9行の間の空白部分に追加

※ 炉跡から西へ約1m、標高72.04mで採取した炭化物試料の年代測定を実施した。床面付近で集中して出土した黒曜石剥片と同じレベルである。(付録参照)

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第129集

大平遺跡Ⅱ

平成12年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

東駿河湾環状道路は沼津、三島市街地の慢性的な交通渋滞を緩和する目的で建設が計画された広域道路であり、沼津市岡宮から愛鷹南麓、長泉町、箱根西麓を経由して函南町の熱函道路に至る予定である。この地域は、古くから多くの埋蔵文化財包含地として知られており、道路建設予定地内にも多くの遺跡が存在している。

大平遺跡は、平成7年度から平成8年度にかけて第Ⅰ期の調査が行われ中世後半から近世にかけて営まれた墓地在検出されている。今回の第Ⅱ期調査でも、15世紀後半から16世紀初頭のかかわり合いを伴う集石墓が検出された。

また、今回、弥生時代前期末の遺物を伴う住居跡が1軒検出された。静岡県内で、この時期の住居跡がはっきり検出されたのはこれが初めてであり、今回の調査は今後の研究進展の一助となることであろう。

近年、静岡県内では開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が多数行われ、膨大な遺跡資料が記録という形で保存、蓄積されてきている。これらの貴重な文化財が研究、教育等、幅広い分野で活用され、文化財に対する理解と保護に役立っていくことを期待する。

最後に、調査ならびに本書の作成にあたっては、国土交通省をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力を受けた。この場を借りて深く御礼申し上げる次第である。また、現地作業・資料整理に関係した多くの方々から心からの感謝の意を表したい。

平成13年9月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齋藤 忠

例 言

1. 本書は静岡県駿東郡長泉町南一色に所在する大平遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 現地発掘調査は平成12年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、国土交通省中部整備局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成12年4月より6月まで実施した。
3. 資料整理は平成13年4月より平成13年6月まで実施した。
4. 調査体制は以下の通りである。
平成12年度 現地調査
所長 齋藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 佐藤達雄
調査研究部次長 及川 司 調査研究二課長 篠原修二
総務課長 杉木敏雄 会計係長 大橋 薫
主任調査研究員 佐野暢彦 技術員 水上綾子
平成13年度 資料整理
所長 齋藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 桑田徳幸 調査研究部長 佐藤達雄
調査研究部次長 栗野克己 及川 司 調査研究三課長 飯塚晴夫
総務課長 本杉昭一 会計係長 大橋 薫
主任調査研究員 佐野暢彦 主任技術員 水上綾子
5. 本書の執筆は第1章第1節を佐野暢彦、その他を水上綾子が担当した。
6. 放射性炭素年代測定は㈱パレオ・ラボに委託し、測定結果は付編として掲載した。
7. 錢貨の保存処理は、当研究所清水整理事務所で行った。
8. 本書掲載の遺物写真は、当研究所三島整理事務所において水上が撮影した。
9. 錢貨の分類は、当研究所岩名建太郎調査研究員によった。
10. 石材鑑定は、当研究所森嶋富上夫技術員によった。
11. 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
12. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管する。

凡 例

1. 前回調査では、調査対象地内を町道と地割を境として、便宜的に西から1区・2区・3区と区分けして調査を行った。今回調査対象となった4,200㎡の範囲は前回調査で2-2区と設定された範囲であるが、混乱を避けるために新たに4区として調査を行った。
2. 前回調査では、建設予定道路のセンターラインを中心軸（Fライン）として10m×10mのグリッドを設定した。今回の調査でも同様にグリッドを設定し、北西隅を原点に南北方向にアルファベット、東西方向に数字を付して、グリッド南西隅の杭名をグリッド名とした。
F-21グリッド杭の国土座標は（X=-94554.852, Y=36330.153）、F-24グリッド杭の国土座標は（X=-94568.121, Y=36357.059）である。
3. 中世墓の推定範囲は茶色の線で示した。
4. 遺物・遺構の観察表・計測表において、推定値・復元値には括弧を付して表記した。
5. 上器の色調は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997年版）を使用した。
6. 本文中で使用する遺構・遺物の略号は下記の通りである。

遺 構		遺 物	
SB	住居跡	P	土 器
SF	土 坑	S	石 器
SP	小 穴(ピット)	R	礎
SX	不明遺構(遺物集中地点)	M	金属器(鉄貨)
		— —	スリ面

目 次

序	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	1
第4節 土層	2
第Ⅱ章 弥生時代の遺構と遺物	9
第Ⅲ章 中世の遺構と遺物	16
第Ⅳ章 中世以降の遺構	27
第Ⅴ章 まとめ	30
付編 放射性炭素年代測定	35
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 土層概念図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 グリッド配置図	4
第4図 時代別遺物分布範囲	5
第5図 土層堆積状況図	7
第6図 弥生時代遺構・遺物分布図	11
第7図 1号住居跡実測図	12
第8図 1号住居跡出土遺物実測図	13
第9図 弥生時代出土遺物実測図	14
第10図 中世遺構分布図	18
第11図 1号墓・2号墓実測図	19
第12図 3号墓・4号墓実測図	20
第13図 5号墓・6号墓実測図	21

第14図	7号墓実測図	22
第15図	8号墓実測図	22
第16図	中世遺物実測図	23
第17図	銭貨拓影図	25
第18図	土坑実測図(1)	26
第19図	土坑分布図	28
第20図	土坑実測図(2)	29

挿表目次

第1表	1号住居跡内小穴計測表	10
第2表	弥生土器観察表	15
第3表	石器観察表	15
第4表	かわらけ観察表	23
第5表	中世墓出土礎観察表	23
第6表	銭貨観察表	24
第7表	中世墓観察表	26
第8表	土坑計測表(1)	26
第9表	土坑計測表(2)	27

写真図版

図版1	1 遺跡遠景(南より)	2 調査区全景(北より)
図版2	1 1号住居跡全景(東より)	2 1号住居跡遺物出土状況(1)(西より)
	3 1号住居跡か跡土層堆積状況(南より)	4 1号住居跡遺物出土状況(2)(南より)
図版3	1 1号墓検出状況(北より)	2 1号墓遺物出土状況(東より)
図版4	1 2号墓検出状況(北より)	2 2号墓遺物出土状況(1)(南より)
	3 2号墓遺物出土状況(2)(北より)	
図版5	1 3号墓・4号墓検出状況(北より)	2 3号墓遺物出土状況(北より)
図版6	1 5号墓検出状況(北より)	2 5号墓上層堆積状況(北より)
	3 5号墓遺物出土状況(1)(北より)	4 5号墓遺物出土状況(2)(南より)
	5 5号墓遺物出土状況(3)(南より)	
図版7	1 6号墓検出状況(南より)	2 8号墓検出状況(西より)
図版8	1 土坑(SF3~16)検出状況(西より)	2 土坑(SF17・19~21)検出状況(東より)
	3 2号土坑検出状況(西より)	4 25号土坑検出状況(西より)
図版9	1 弥生時代遺物(1)	
図版10	1 弥生時代遺物(2)	
図版11	1 中世遺物	

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県東部の三島、沼津、駿東地域は、首都圏から東海道新幹線で約1時間の距離にあり、富士・伊豆・箱根の観光の拠点として、また、古くから東西を結ぶ交通の要所として発展してきた。近年では首都圏から近いということもあいまって、通勤・企業進出という面からも急速な発展をみている。これらのことから、通行する車両も増加の一途をたどっており、主要幹線道路は慢性的な渋滞に悩まされている。東駿河湾環状道路はこのような渋滞を緩和するために計画された、東名高速道路沼津インターチェンジから愛鷹山麓、長泉町で黄瀬川を越えて箱根山西麓の三島市に入り、国道1号線を横断した後、函南町平井の熱海道路に接続する総延長約15kmの高規格幹線道路である。

道路建設計画とともに、対象地域の埋蔵文化財包含地の調査が行われてきた。路線範囲となる市町村教育委員会により、周知の遺跡および遺跡の可能性のある地点のリスタアップが行われ、それを受けて、静岡県教育委員会文化課、市町村教育委員会、当研究所の3者によって現地踏査が行われた。その結果、40数カ所について、当研究所が調査に当たることになった。

大平遺跡は、平成7年度に確認調査、平成7年度から平成8年度にかけて本調査、平成9年度に資料整理を行っている。今回調査が行われた、前回の調査で2-1区、3区と呼んでいた調査区の間広がる4,200㎡は、遺跡内に残っていた未買収地の買収完了を待って同時に調査する予定であった。しかし、平成11年度に、委託者である建設省中部地方建設局沼津工事事務所（当時）からの本調査を進めたいとの意向を受け、指導機関である静岡県教育委員会文化課、当研究所の3者による協議の結果、この部分だけを先に調査することになった。

こうして、平成12年4月から調査が行われることになった。

第2節 調査の方法

調査は重機による表土除去から始め、並行して調査区の東西及び南隣際に幅約1mのトレンチを設定し、基本土層の確認を行った。トレンチ調査により調査区の中央と南東隅に河道跡を確認できた。中央の河道跡を境として南側に中世、北側から弥生時代の遺物が出土したので、調査も河道跡南側の中世面と北側の弥生面とに分けて進めた。南側は遺物が出土した砂礫層上面までの中間層を重機で除去し、遺物出土地点を中心に人力で遺構検出を行った。北側では弥生土器が出土した西トレンチの側から人力掘削を進め、遺構検出を行った。遺構図面、上層図面は1/20、1/10の縮尺図面を作成した。写真撮影は35mmカラーネガ・モノクロ・リバーサルを主体に行い、必要に応じて6×7判モノクロによる撮影を行った。遺跡の全体写真は衛星技術コンサルに委託し、ラジコンヘリコプターによる空中撮影を行った。

第3節 調査の経過

1. 現地調査

12年度調査は4月11日より開始した。翌12日から重機による表土除去を行い、中世以降の土坑を16基検出した。南トレンチより銭貨とかわかけ片が出土し、前回調査と同時期の遺構が存在する可能性が考えられた。遺構確認は後日行うこととして、出土状況を記録して遺物を取り上げた。河道跡を挟んで南

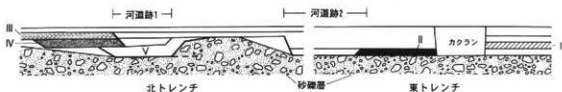
側に中世、北側に弥生の包含層が堆積していることが判明したので、調査は北側の弥生面から始め、5月のゴールデンウィーク明けからは、南側の中間層を重機により除去する作業を並行して行うこととした。弥生土器の出土した暗褐色砂層を人力により掘削を行ったところ、土器や黒曜石剥片が集中して出土した。さらに焼土跡が確認され、住居跡である可能性が高まった。ここで北側弥生面の調査を一時停止し、南側の中世面の調査を開始した。中世の遺物が出土した暗褐色砂層、砂礫層はI-23・24、H-24グリッドに拡がっていた。遺物の出土を手がかりに遺構の確認を行い、8基の中世墓を検出した。6月に入ると雨天で作業中止になる日が多くなった。北側の弥生面調査を再開するが、検出面が砂層のため住居のプラン確認はかなり困難であった。住居跡の調査を終え、調査区全体の空中写真撮影を行った。遺構の実測作業、写真撮影を終了し、7月3日に調査を完了した。

2. 整理作業

平成13年4月3日より整理作業を開始した。現地で記録した実測図面から遺構図版・遺跡全体図版等を作成した。遺物については、土器は現地作業と並行して水洗・注記作業を行ったので、接合・復元作業から始め実測作業を行った。石器は殆どが剥片であったので、超音波洗浄機を利用して水洗し、重量を計測して台帳に記録した。銭貨は当研究所の清水整理事務所で保存処理を行った後、計測し、拓影を作成した。遺物写真は6×7判の中型カメラを使用して三島整理事務所内で撮影した。

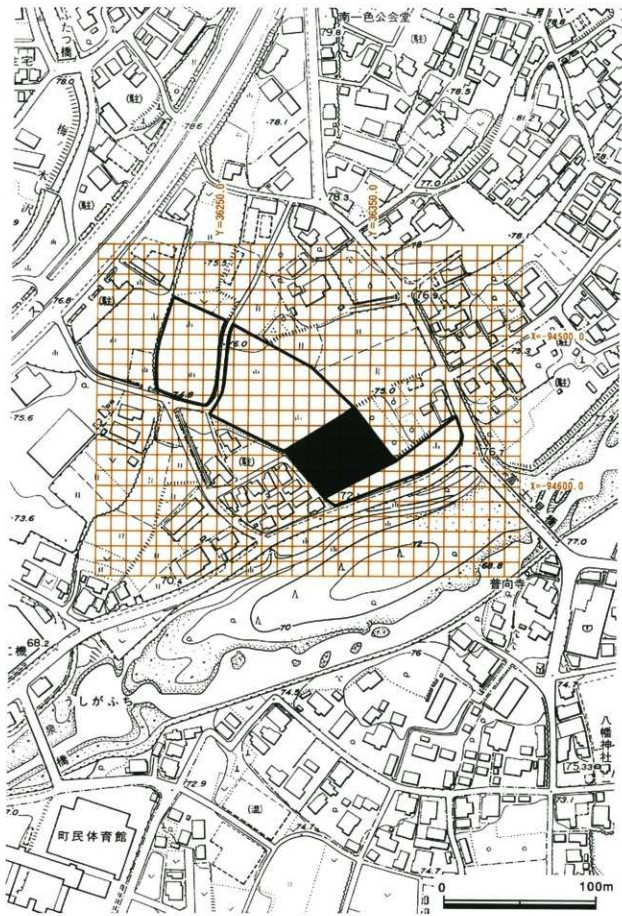
第4節 土層

調査区の南・西・東壁際にトレンチを設定して土層確認を行ったところ、地点によって土層堆積に違いが見られた。調査区内を流れていた河川が、流れを変える度に土砂の堆積、浸食を繰り返していたようですが土層から伺える。各トレンチの土層堆積状況は第5図に示す。河道跡と包含層の層位的関係を概念図(第1図)で示し、包含層はトレンチ毎の層序とは別に共通の層名をローマ数字で表した。調査区の中央部を走る河道跡1は、少なくとも2つの流路が確認できる。弥生土器が出土したIV層は、2区の段丘崖からつながる低地から河川が埋まってできた平坦部へ堆積した土層であり、新しい流路により浸食されている。調査区の北壁寄りほどⅢ・IV層の堆積は薄く、北端では表土の下は大型礫が混入する砂礫層であった。調査区南側は現地表面から1m以上の深さで耕作土が堆積している。中世の遺物はⅡ層から出土し、遺構はⅡ層の下の砂礫層上面より検出した。中世包含層(Ⅱ層)は河道跡2により浸食されている。

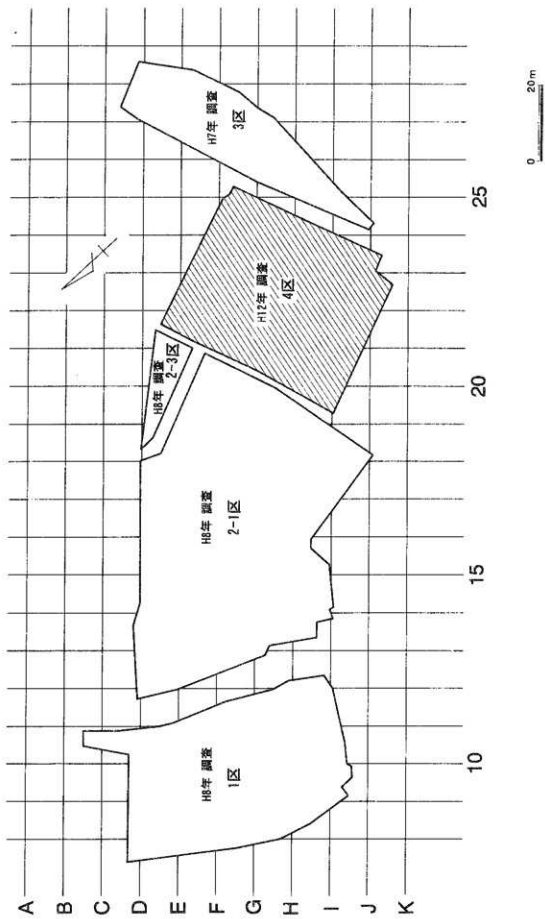


第1図 土層概念図

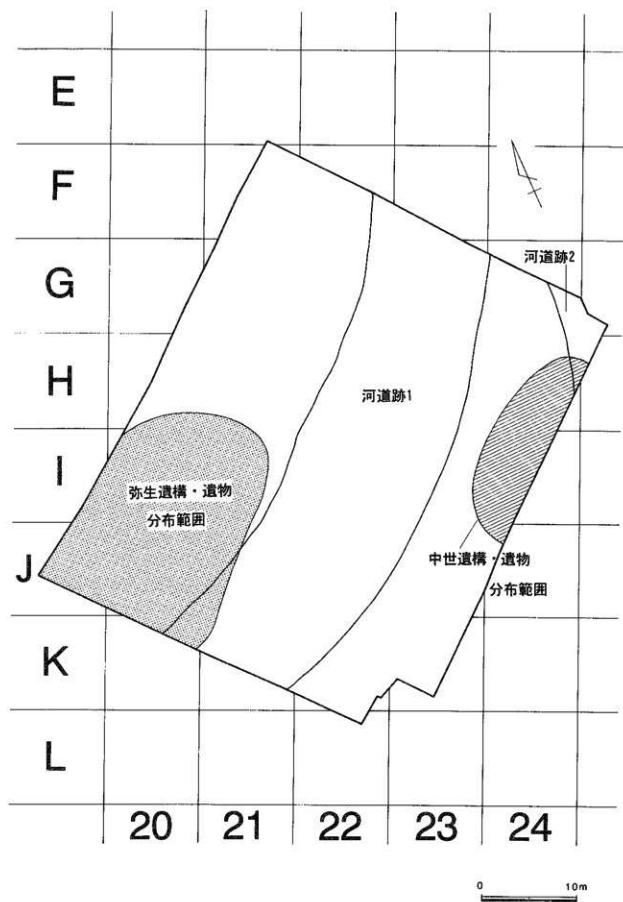
- I層 褐色砂層 上面で中世以降の土坑を検出(南・西トレンチ4層)
- Ⅱ層 暗褐色砂層 中世の包含層(南トレンチ9層)
- Ⅲ層 褐色混土砂層 上面で中世の土坑検出(東・西トレンチ13層)
- Ⅳ層 暗褐色混土砂層 弥生時代包含層(東・西トレンチ14層)
- V層 黒褐色砂層と暗褐色砂層の互層 弥生土器出土(西トレンチ12層)



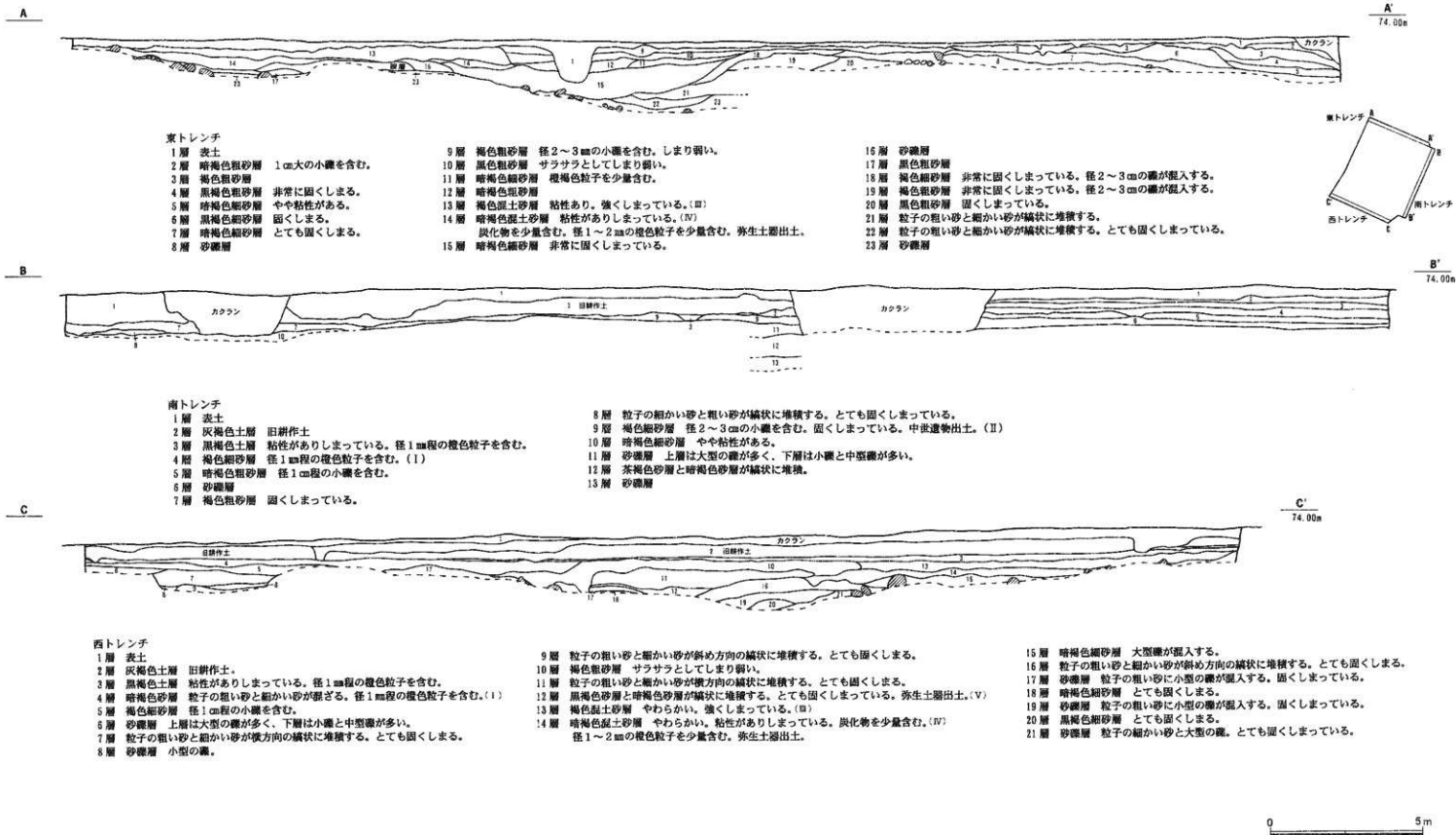
第2図 遺跡周辺地形図



第3図 グリッド配置図



第4圖 時代別遺物分布範圍



第5図 土層堆積状況図

第Ⅱ章 弥生時代の遺構と遺物

1. 概要

河道跡1の北側に堆積する暗褐色混土砂層を、西トレンチ側から人力によって掘削を行ったところ、遺物が集中して出土する箇所があり、調査の結果住居跡1軒と黒曜石剥片の集中箇所2カ所を検出した。出土遺物は弥生前期末の土器と石器類である。遺物の分布は西トレンチ側に集中しており、東側では殆ど出土しなかった。

2. 住居

1号住居跡（第7図）

J-20グリッドから弥生土器と黒曜石の剥片が集中して出土した。特に黒曜石剥片の集中する辺りには、火を受け赤変した砂と炭化物が径100cm程の範囲に分布しており、その中央から炉跡を検出した。住居跡のプラン確認のためにサブトレンチを設定したところ、炉跡に近いところでは炭化物を含む固くしまった砂が堆積し、炉跡から2mほど離れるとしまりのない砂が堆積している様子が観察できた。住居跡は南西側では残存状況が悪く、西側はトレンチによって削平されているが、残存状況から推定すると径3.9mの円形か隅丸方形の平面形となる。

炉跡は住居跡のほぼ中央部に位置する。平面形は50×30cmの不整形な楕円形を呈し、検出面から5cm程掘り下げると赤く焼けた硬化面に達した。炉跡の周りには炭化物粒が大量に散っていた。

掘り方調査で11基の小穴（ピット）を検出したが、いずれも残存する深さは浅く、住居に伴う柱穴を確定することはできなかった。SP11は地山の礫を小穴（ピット）の底面として利用していたようで、礫の上には擦り面が見られた。

遺物は土器と石器が出土した（第8図）。

1～3は甕形土器である。1は口縁部から胴下部まで約1/3が残存する。口径は推定で28.0cm。口縁部には山形突起、口縁端部には楕円形の押捺が施されている。山形突起は4単位が残存し、推定で8単位となる。外面はナデ調整の上から4本単位の茎束状原体による条痕を、口縁部は斜方向、胴部は縦方向に施す。内面は口縁部がミガキ、胴中位がケズリ、胴下位はケズリのあとナデ調整を行う。2、3は甕形土器の胴部片で同一個体である。西側トレンチから出土したが、出土位置、層位から1号住居跡に伴う土器であると考えた。外面は2・3本単位の茎束状原体による条痕の上からナデ、内面は横方向にナデ調整する。

4は輝石安山岩製の石皿である。5は飛行機形の石鏃。黒曜石製である。その他黒曜石の剥片が多数出土した。

3. 遺物集中箇所（SX03・04）

黒曜石の剥片が径100cm程の範囲から集中して出土する箇所を2カ所検出した。周囲を精査したが、これらに伴う遺構は確認できなかった。

SX03

H-21グリッド中央部より、100×60cmの範囲から黒曜石剥片が集中して出土した。黒曜石剥片以外の遺物は出土しなかった。

SX04

J-20グリッド東側より、100×50cm範囲から黒曜石剥片が集中して出土した。周囲には炭化物が分布

していた。この黒曜石剥片集中箇所周囲径3mの範囲から土器片等の遺物がまとまって出土した。遺物の出土状況や黒曜石の剥片と炭化物の分布する様子は1号住居跡の状況と類似しており、住居跡であった可能性が考えられる。

遺物は土器と石器が出土した(第9図2～5・13)。2は変形土器の口縁部片である。口縁部は直立し僅かに外反する。口縁端部をつまみ出し、口唇部は平坦にナデ調整されている。外面には縄文(RL半節)の上から横方向のナデ、内面は横方向のナデ調整を施す。3～5は胴部片で同一個体である。外面はミガギ、内面は横方向のケズリ。胴部片のため器種は断定できないが、壺形土器の可能性も考えられる。

4、5の外面には煤が付着している。

13は黒曜石製の石鏝である。先端部と一方の基部を欠いている。

4. 包含層出土遺物

土器(第9図1・6～12)

1は胴部が張り口縁が緩やかに外反する変形土器である。口縁部に山形突起が付くが、全体で何単位になるかは不明。口径は推定で28.6cm、胴最大径28.0cm。外面は茎束状原体による条痕の上からナデ調整。内面はケズリ。6は変形土器の口縁部である。波状口縁で、口唇部は平坦にナデ調整されている。外面は2本単位の茎束状原体による条痕、内面はナデ調整である。7～11は変形土器の胴部片である。外面は4・5単位の茎束状原体による条痕、内面はナデ調整を施す。6～11は胎土に雲母を多く含む土器で、同一個体である。胎土に雲母を含む土器は在地の土器には類例がなく、丹沢・箱根山系、あるいは富士川上流域から甲府盆地にかけてのいずれかの土地から搬入されたものと考えられる¹⁾。12は底部片である。河道跡1内から出土した。胴部には茎束状原体による条痕を施し、底面には納代痕が残る。

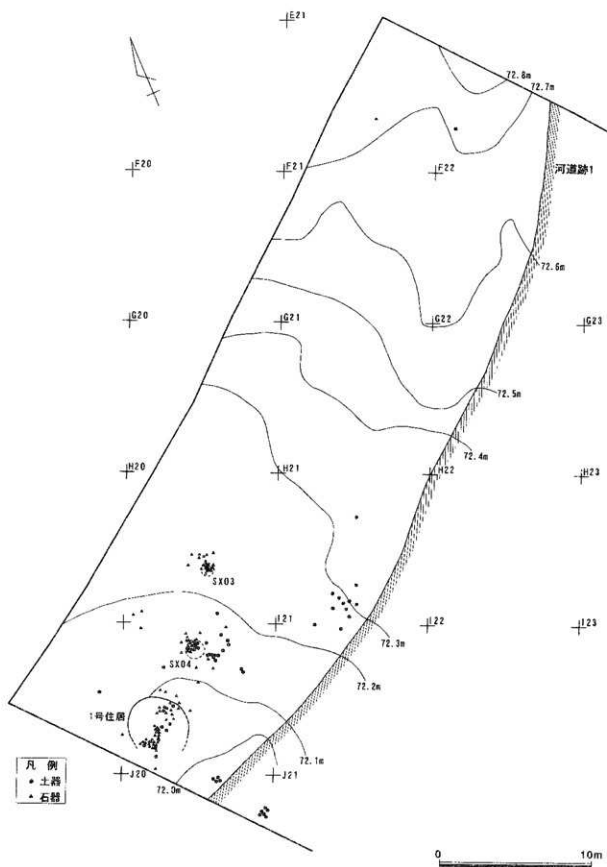
石器(第9図14・15)

黒曜石製の石鏝である。14は基部を欠く。15は先端部を欠く。

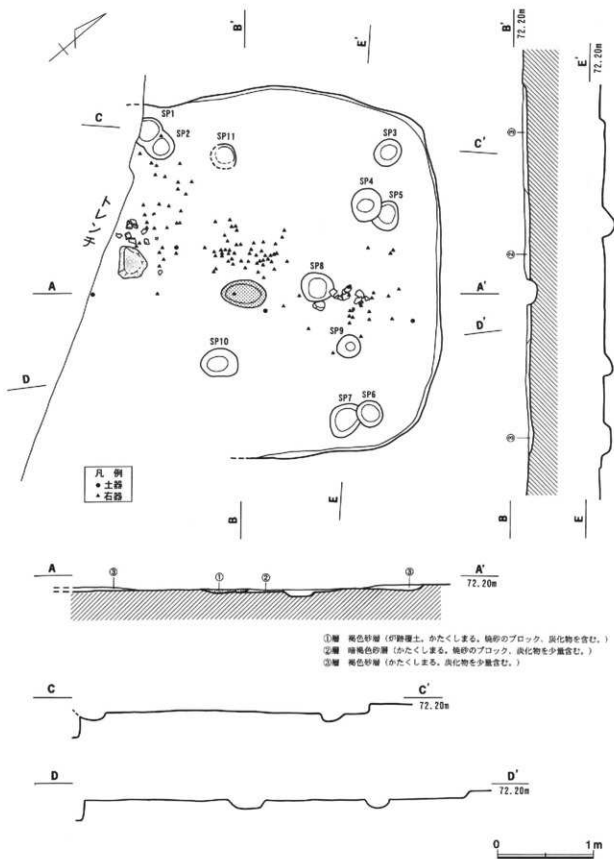
第1表 1号住居跡内小穴計測表

遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
SP 1	34	(30)	8	SP2と切り合う
SP 2	31	30	7	SP1と切り合う
SP 3	31	27	10	
SP 4	37	32	12	SP5と切り合う
SP 5	33	(26)	9	SP4と切り合う
SP 6	28	28	9	SP7と切り合う
SP 7	40	31	9	SP6と切り合う
SP 8	35	30	8	
SP 9	26	24	10	
SP10	39	29	10	
SP11	(28)	(22)	(4)	柱穴の下にスリ面のある石を伴う

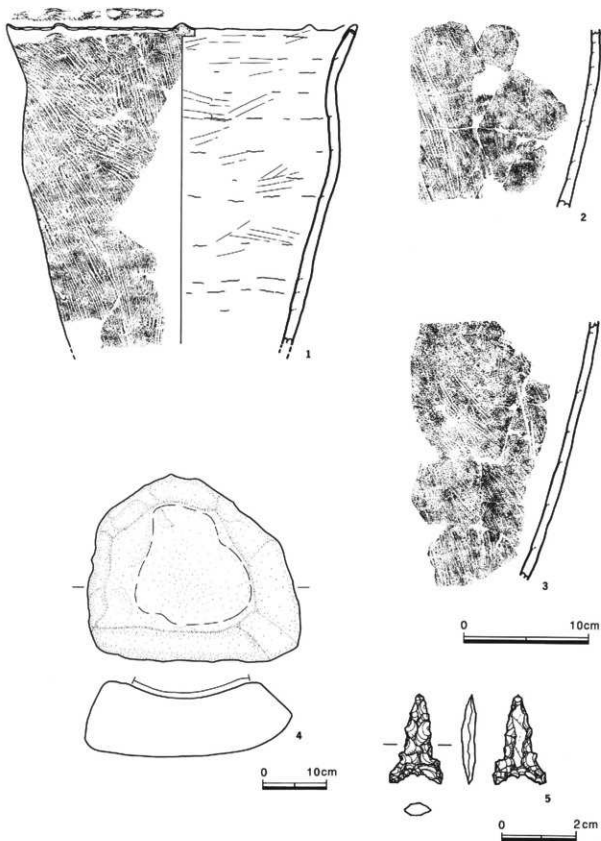
¹⁾ 浜松市博物館 佐藤山紀男氏のご教示による。



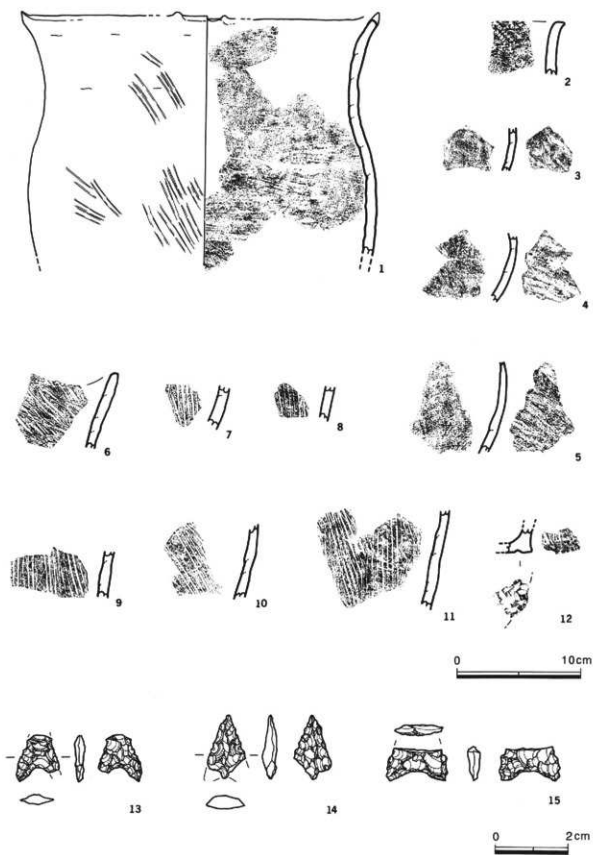
第6圖 弥生時代遺構・遺物分布圖



第7図 1号住居跡実測図



第8图 1号住居跡出土遺物実測図



第9圖 弥生時代出土遺物実測図

第2表 弥生土器観察表

挿図番号	図版番号	グリッド/層位/遺構	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
第8図 1	図版 9-1	1号住居跡	甕	口径:(28.0) 頸部径:(24.0) 胴部径:(25.4) 器高:(25.8)	輝石・灰色岩片をごくわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	口縁部~胴部 約1/3残
第8図 2	図版 9-3	1号住居跡	甕	器高:(14.3)	石英・長石・輝石・白色岩片を多く含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第8図 3	図版 9-4	1号住居跡	甕	器高:(20.5)	石英・長石・輝石・白色岩片を多く含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 1	図版 9-2	K-20IV層	甕	口径:(28.6) 頸部径:(24.7) 胴部径:(28.0) 器高:(19.3)	石英・長石・輝石・白色岩片を多く含む。	良	10YR6/4 黄褐	口縁部一部残、 胴部1/3残
第9図 2	図版 10-7	SX04	甕	器高:(4.3)	石英・長石・輝石をわずかに含む。	良	7.5YR5/6 明褐	口縁部破片
第9図 3	図版 10-8	SX04	甕	器高:(3.5)	長石・角閃石・白色岩片をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 4	図版 10-11	SX04	甕	器高:(5.1)	長石・角閃石・白色岩片をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 5	図版 10-12	SX04	甕	器高:(7.2)	長石・角閃石・白色岩片をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 6	図版 10-1	I-21IV層	甕	器高:(5.9)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	5YR4/4 にぶい赤褐	口縁部破片 (波状口縁)
第9図 7	図版 10-6	I-21IV層	甕	器高:(3.4)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	7.5YR3/4 暗褐	胴部破片
第9図 8	図版 10-5	I-21IV層	甕	器高:(2.6)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	7.5YR3/4 暗褐	胴部破片
第9図 9	図版 10-2	I-21IV層	甕	器高:(3.6)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 10	図版 10-3	I-21IV層	甕	器高:(5.8)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 11	図版 10-4	I-21IV層	甕	器高:(8.0)	石英・長石・雲母(1~2mm程度、金色)をやや多く含む。 黒色鉱物をわずかに含む。	良	10YR6/6 明黄褐	胴部破片
第9図 12	---	K-20V層	甕	器高:(1.8)	長石をわずかに含む。輝石をやや多く含む。	良	10YR5/4 にぶい黄褐	底部破片

第3表 石器観察表

挿図番号	図版番号	グリッド/層位/出土遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第8図 5	図版10-14	1号住居跡	石鏃	黒曜石	24.0	14.0	4.0	0.5	
第9図 13	図版10-15	SX04	石鏃	黒曜石	(12.5)	(15.5)	(3.0)	(0.2)	欠損
第9図 14	図版10-16	J-20 IV層	石鏃	黒曜石	(21.5)	(10.0)	(4.5)	(0.3)	欠損
第9図 15	図版10-17	F-21 IV層	石鏃	黒曜石	(9.0)	(16.5)	(3.5)	(0.3)	欠損
第8図 4	図版10-13	1号住居跡	石皿	輝石安山岩	300.0	342.0	135.0	1750.0	

第三章 中世の遺構と遺物

1. 概要

I-23・24、H-24グリッドに広がる砂礫層より中世墓8基を検出した。遺構の認定は第一に遺物の出土を目安とした。その他に、遺物は出土していないが礫の間から小穴を確認できたものも中世墓に含めた。今回確認できた墓は8基のみであるが、実際はより多数の墓が存在していたと思われる。遺物の出土によって遺構を認定したため、墓の上部構造を確認することができなかった。小穴や遺物の周りで大形の礫が巡る様子が見られたので、大形礫で囲まれた部分を墓の範囲と想定し、図而上に茶色の線で示した。前回調査では中世墓から焼骨が多量に出土しているが、今回確認した中世墓からは焼骨は検出されなかった。中世墓の他に河道跡1の範囲内から土坑8基を検出した。遺物が出土していないため時期の確定はできない。前回調査でも河道跡で土坑や小穴が検出されているが、その用途については不明であった。

遺物はかわらけと銭貨、用途不明の礫が出土した。殆どが遺構に伴っての出土であり、遺構外からはかわらけ片と陶器片が数点出土したがいずれも小片であった。

2. 中世墓

1号墓・2号墓（第11図）

1号墓はH-24グリッドより検出した。南トレンチ調査でかわらけ片と銭貨が出土したので、周辺を精査したが掘込みは確認できなかった。墓の範囲は120×105cmと想定した。

かわらけは底部片である。底部内面はナデ整形が施され、外面には糸切り痕の上に板状圧痕が残る（第16図1）。銭貨は7枚が重なった状態で出土し、5cm程離れて3枚が重なって出土した。いずれも北宋銭である。10枚の銭貨をまとめて副葬する状況は、「六道銭」という宗教的意識よりも、むしろ銭の単位「疋」を意識したものかもしれない。

2号墓は1号墓の北東側に接している。ほぼ完形の2枚のかわらけが、大形礫に立てかけるような状態で縦に重なって出土した。かわらけの下より34×23cm、深さ6cmの小穴を検出した。墓の範囲は推定で80×75cmである。

2枚のかわらけ（第16図2・3）のうち、2は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形である。底部内面には凹凸が残るような強いナデ整形が施され、外面には板状圧痕が残る。3は口縁部が緩く外反する器形である。底部外面には糸切り痕が残る。

1号墓と2号墓の新旧関係は不明である。

3号墓・4号墓（第12図）

3号墓はI-24グリッドより検出した。南トレンチ調査でかわらけ片が出土し、周辺を精査したところ、かわらけの下より28×20cm、深さ5cmの小穴を検出した。3号墓の範囲は推定で80×60cmである。

かわらけは胴部下部に厚みがあり、丸みを持っている。口縁部は直線的に開く。底部外面には糸切り痕が残る（第16図4）。

4号墓は3号墓の西側に接する。遺物は出土しなかったが50×45cm、深さ12cmの楕円形の小穴を検出した。範囲は推定で105×90cmである。

3号墓の小穴は4号墓の一部と思われる大形礫の上に造られており、新旧関係は4号墓が古く、3号墓が新しい。

5号墓・6号墓（第13図）

5号墓はH-24グリッドより検出した。礫と礫の間からかわらけが出土したので、大形の礫を取り除き推定で50×50cm、深さ22cmの小穴を検出した。この際に取り除いてしまった礫は、あるいは墓の上部構造であったかもしれない。大形の礫の下から加工された礫（R1）が平坦に加工された面を上に向け、斜めに立った状態で出土した。この礫は墓を囲む礫と比べると異質で、何らかの用途で墓に供えられたと思われる。2枚のかわらけが重なって置かれており、それらと軽石（R2）が並んだ状態で出土した。底面近くから6枚の銭貨が3枚1組で重なって出土した。1組は縁を加工（おそらく八角形）した銭（M2-2）を中央に挟み、もう1組は3枚の銭を表・裏・表と重ねている。いずれも、中央に異なる1枚を挟むという行為が行われている。葬の範囲は推定で70×65cmである。

2枚のかわらけ（第16図5・6）のうち、5は胴部が直線的に立ち上がる器形である。底部内面にナデ調整の痕が残り、外面には糸切り痕が残る。6はやや外反気味の胴部が、口縁の下で弱く屈曲して直線的に立ち上がる。底部外面に糸切り痕を残す。銭貨はいずれも北宋銭である。礫は2個出土した。R1（図版11-6）は細粒安山岩である。R2（図版11-7）は多孔質安山岩で、加工されているが用途は不明である。菰山町の御所之内遺跡調査で様々な大きさの軽石が出土している。それらは加工されているが用途については明らかでない¹⁰⁾。小穴の底面北東隅に径20cm、深さ5cm程の落ち込みが見られたが、遺物等は出土しなかった。

6号墓は5号墓の西側に接している。遺物は出土しなかったが、大形の礫で囲まれる範囲を墓と想定した。当初1基と考えたが、実際は少なくとも2基の墓が接続しているようである。範囲は推定で6号墓（a）が90×75cm、6号墓（b）が75×55cmである。5号墓は6号墓と一部の礫を共有しており、新旧関係は6号墓（a）が古く、6号墓（b）、5号墓の順に造られたと思われる。

7号墓（第14図）

I-24グリッドより43×40cm、深さ25cmの小穴を検出した。遺物は出土しなかったが、小穴の周囲に大形礫が巡る様子が観察できたので集石墓として考えた。範囲は推定で90×88cmである。

8号墓（第15図）

I-24グリッドより50×40cm、深さ19cmの小穴を検出した。遺物は出土しなかったが、小穴の周囲に大形礫が巡る様子が観察できたので集石墓として考えた。範囲は推定で77×70cmである。

3. その他の遺構

土坑（第18図）

17号土坑（SF17）・19～21号土坑（SF19～SF21）はK-22、J-22グリッドより検出した。平面形は円形、又は楕円形、覆土は径2～3cmの礫を含む褐色砂である。

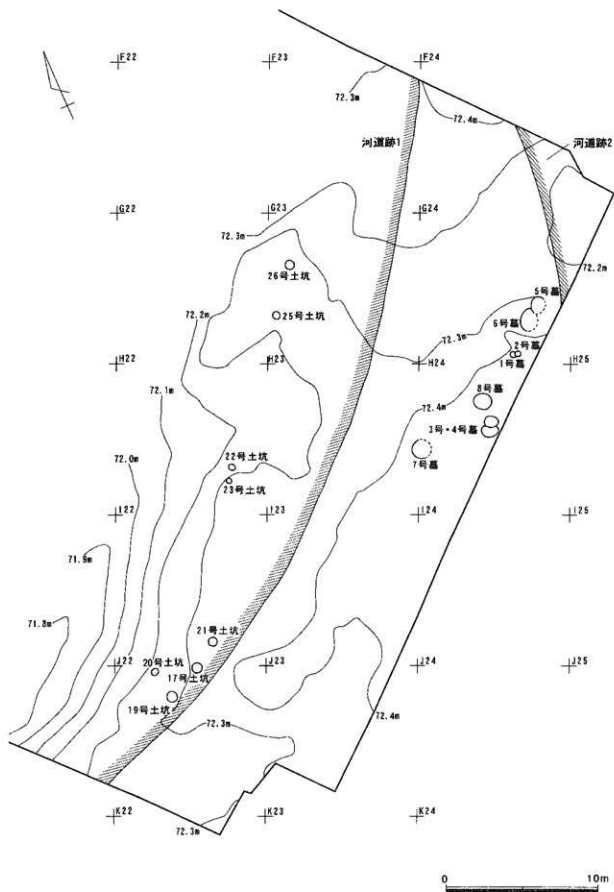
22・23号土坑（SF22・23）はI-22グリッドより検出した。平面形は円形で覆土は褐色砂である。

25・26号土坑（SF25・26）はH-23グリッドより検出した。平面形は円形で覆土は褐色砂である。

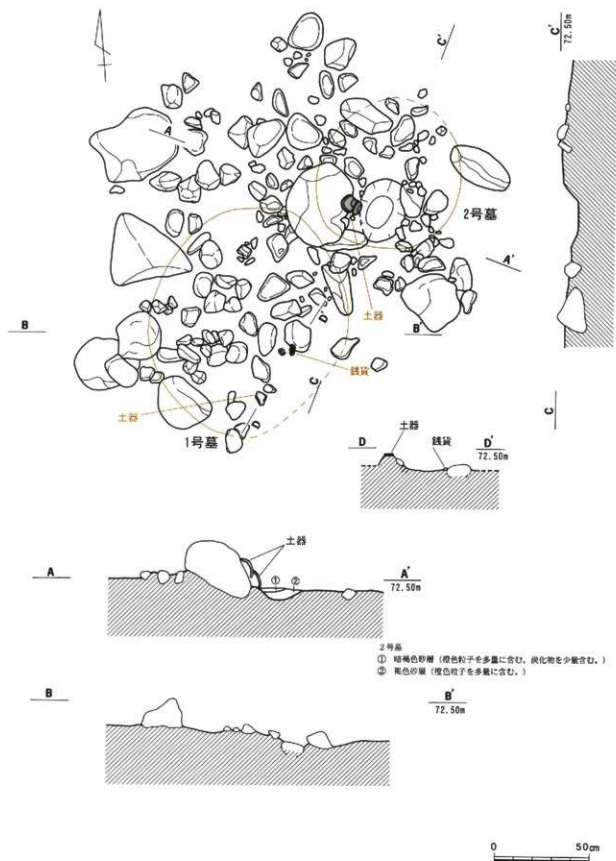
いずれの上坑からも遺物は出土しなかった。

¹⁰⁾ 当研究所 岩名建太郎調査研究員の教示による。

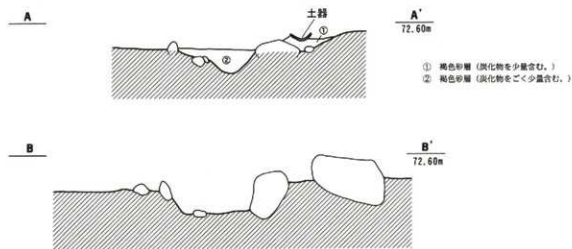
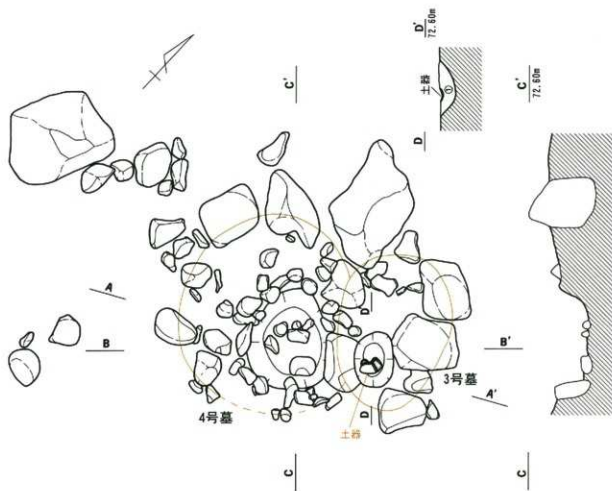
¹¹⁾ 菰山町教育委員会 池谷初恵氏のご教示による。



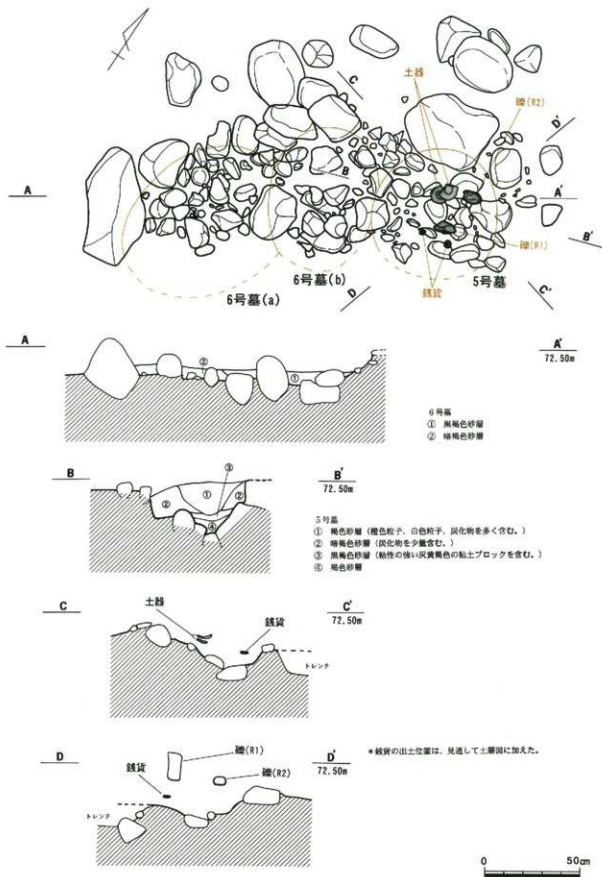
第10圖 中世遺構分布圖



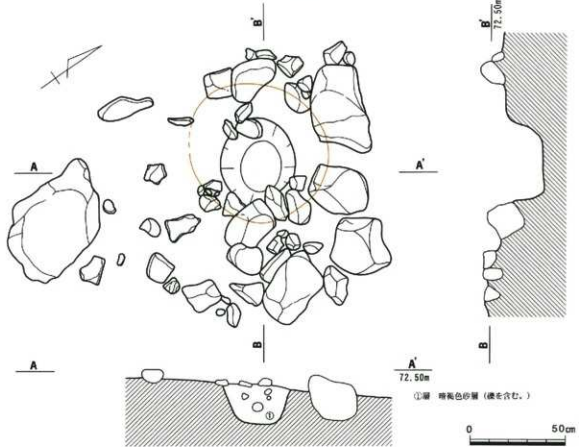
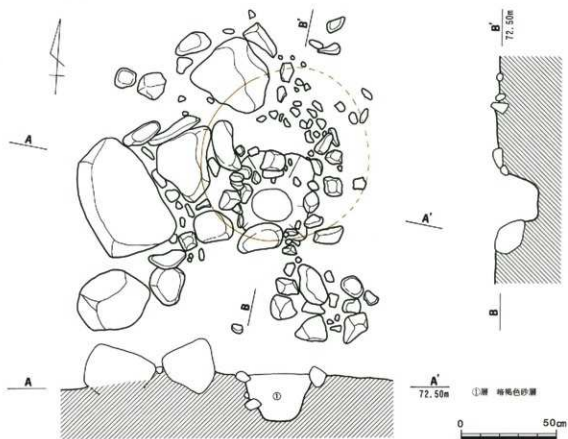
第11图 1号墓・2号墓实测图

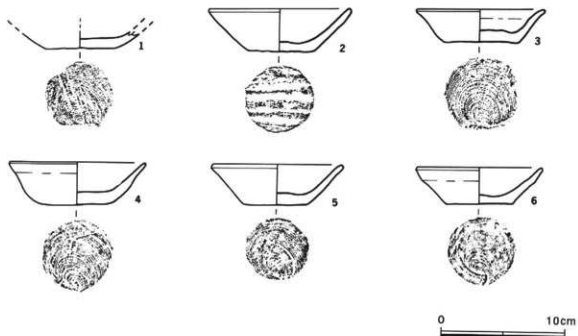


第12図 3号墓・4号墓実測図



第13図 5号墓・6号墓実測図





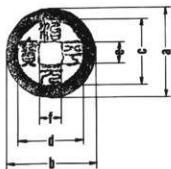
第16図 中世遺物実測図

第4表 かわらけ観察表

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	遺物 番号	法量 (cm)			胎土	残存状況	備考
				口径	底径	器高			
第16図 1	—	1号墓	P-1	—	5.4	(1.3)	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	底部のみ	板状圧痕
第16図 2	図版 11-1	2号墓	P-1	10.9	5.2	3.5	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	完形	板状圧痕
第16図 3	図版 11-2	2号墓	P-2	10.0	5.8	2.7	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	完形	
第16図 4	図版 11-3	3号墓	P-1	10.4	5.1	3.5	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	口縁部一部欠損	
第16図 5	図版 11-4	5号墓	P-1	10.1	5.1	3.2	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	一部欠損	
第16図 6	図版 11-5	5号墓	P-2	9.7	5.2	2.9	ごく少量の黒色鉱物、少量の長石・石英・白色岩片を含む。	一部欠損	

第5表 中世墓出土礎観察表

図版番号	出土遺構	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
図版11-6	5号墓	R1	14.5	9.6	4.3	930.0	細粒安山岩
図版11-7	5号墓	R2	9.9	7.8	4.8	300.0	多孔質安山岩

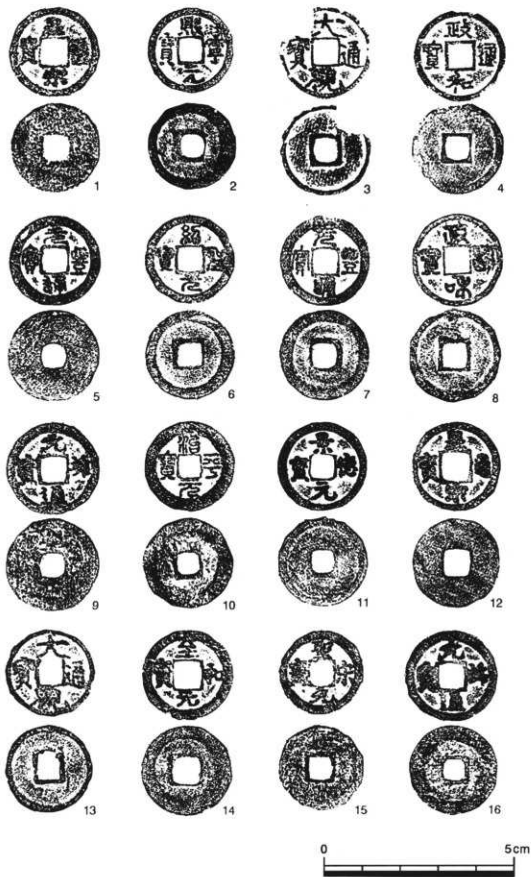


錢貨各部測点

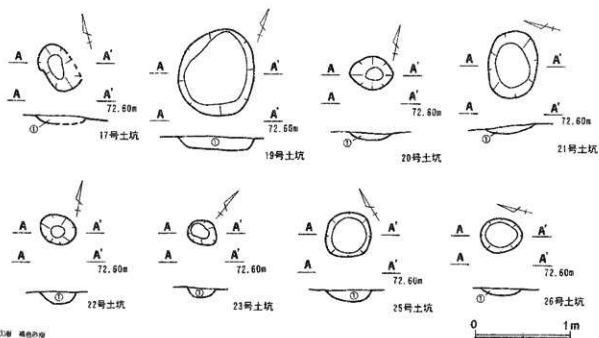
第6表 錢貨観察表

挿図 番号	図版 番号	出土 遺構	遺物 番号	銭名	書体	初鑄 年代	外径 (a)	外径 (b)	内径 (c)	内径 (d)	銭孔 (e)	銭孔 (f)	銭厚	重量	備考
第17図 1	図版 11-8	1号墓	M1-2	皇宋通寶	真書	1038年	24.0	24.0	20.0	20.0	7.0	7.0	0.95	2.0	
第17図 2	図版 11-9	1号墓	M1-3	熙寧元寶	真書	1068年	23.0	23.0	19.0	19.0	6.0	6.0	1.05	2.9	
第17図 3	図版 11-10	1号墓	M1-4	大觀通寶		1107年	24.0	24.0	22.0	22.0	6.5	6.5	0.95	1.5	一部欠損
第17図 4	図版 11-11	1号墓	M1-A	政和通寶	分楷	1111年	24.0	24.0	21.0	21.0	6.5	6.5	1.00	2.7	
第17図 5	図版 11-12	1号墓	M1-B	元豐通寶	篆書	1078年	24.0	24.0	18.5	19.0	6.5	6.5	0.80	3.2	裏面は縁・ 郭共に薄い
第17図 6	図版 11-13	1号墓	M1-C	紹聖通寶	篆書	1094年	23.5	23.5	19.0	19.0	6.5	6.5	1.15	3.7	
第17図 7	図版 11-14	1号墓	M1-D	元豐通寶	篆書	1078年	24.0	24.0	19.0	19.0	6.5	6.5	0.90	3.2	
第17図 8	図版 11-15	1号墓	M1-E	政和通寶	篆書	1111年	24.5	24.0	22.0	22.0	7.0	6.5	0.80	2.9	
第17図 9	図版 11-16	1号墓	M1-F	元祐通寶	行書	1086年	24.5	24.5	21.0	21.0	6.5	6.5	0.80	3.3	
第17図 10	図版 11-17	1号墓	M1-G	治平元寶	篆書	1064年	24.0	24.0	17.0	18.0	6.0	6.5	0.90	2.8	
第17図 11	図版 11-18	5号墓	M1-1	景德元寶		1004年	24.0	24.0	19.5	19.5	6.0	6.0	0.90	3.6	
第17図 12	図版 11-19	5号墓	M1-2	皇宋通寶	真書	1038年	24.0	23.5	20.0	20.0	7.5	7.0	0.75	2.8	
第17図 13	図版 11-20	5号墓	M1-3	大觀通寶		1107年	24.0	24.0	21.0	21.0	(8.0)	6.0	1.10	2.8	銭孔一部 欠損
第17図 14	図版 11-21	5号墓	M2-1	至和元寶	真書	1054年	24.0	24.0	19.0	19.0	7.5	7.5	1.05	2.8	
第17図 15	図版 11-22	5号墓	M2-2	聖宋元寶	行書	1101年	23.0	23.0	18.0	18.0	6.0	6.0	1.00	3.1	周縁を八角 形?に加工
第17図 16	図版 11-23	5号墓	M2-3	元祐通寶	行書	1086年	24.0	24.0	20.0	20.0	6.5	6.5	0.70	2.2	

単位(mm)(g)



第17圖 錢貨拓影圖



第18圖 土坑実測図(1)

第7表 中世墓観察表

遺構番号	グリッド	規模(推定)	小穴		主軸 (小穴)	遺物
			平面形	(長×短×深さ)		
1号墓	H-24	120×105	—	—	—	かわらけ・銭貨
2号墓	H-24	80×75	楕円形	34×23×6	N-26°-E	かわらけ
3号墓	I-24	80×60	楕円形	28×20×5	N-44°-W	かわらけ
4号墓	I-24	105×90	楕円形	50×45×12	N-43°-W	
5号墓	H-24	70×65	—	50×50×22 (20×20×5)	N-33°-E	かわらけ・銭貨
6号墓(a)	H-24	90×75	—	—	—	
6号墓(b)	H-24	75×55	—	—	—	
7号墓	I-24	90×88	楕円形	43×40×25	N-2°-W	
8号墓	I-24	77×70	楕円形	50×40×19	N-54°-W	

単位(cm)

第8表 土坑計測表(1)

遺構番号	グリッド	層位	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
17号土坑	K-22	砂礫層	楕円形	54	30	10	
19号土坑	K-22	砂礫層	楕円形	92	80	12	
20号土坑	K-22	砂礫層	円形	46	35	8	
21号土坑	J-22	砂礫層	円形	70	52	11	
22号土坑	I-22	砂礫層	円形	39	32	12	
23号土坑	I-22	砂礫層	円形	32	26	10	
25号土坑	H-23	砂礫層	円形	52	46	12	
26号土坑	H-23	砂礫層	円形	44	36	7	

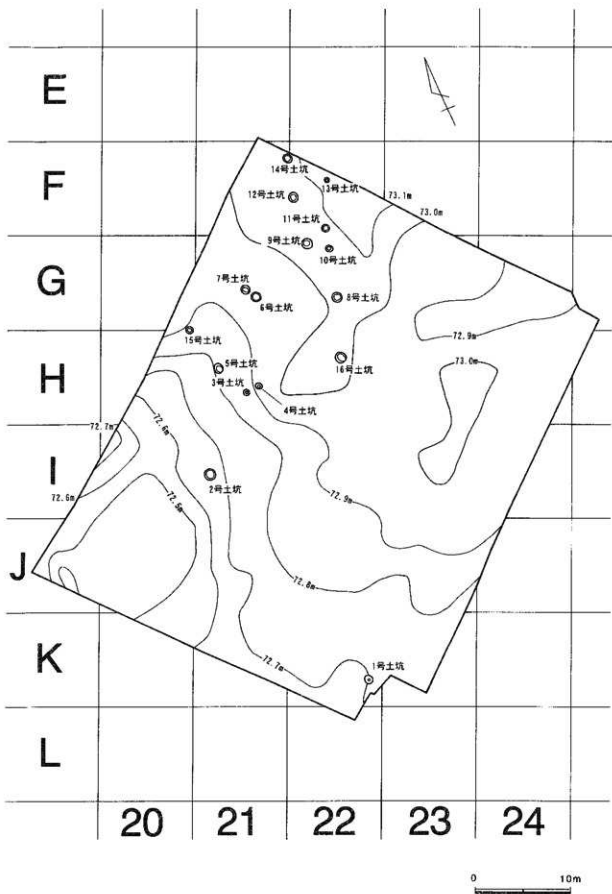
第IV章 中世以降の遺構

表土除去後、16基の土坑を検出した（第19図）。1号土坑（SF01）は調査区南西隅K-22グリッドより検出した。直径122cm、短径110cm、深さ32cm、平面形は円形を呈し、覆土は、①層黒褐色混砂土層（少量の炭化物含む）、②層暗褐色混砂土層（少量の炭化物含む）、③層黒褐色混砂土層（粘性あり）の3層に分層できた。遺物は出土しなかった。2～16号土坑（SF02～16）は調査区の北側（特に北東部）に分布している。平面形は円形又は楕円形で、長径が100cm前後の土坑と60cm前後の土坑がある。覆土は1層または2層に分層できた。①層は黒褐色土層、②層は暗褐色土層である。遺物は出土しなかった。

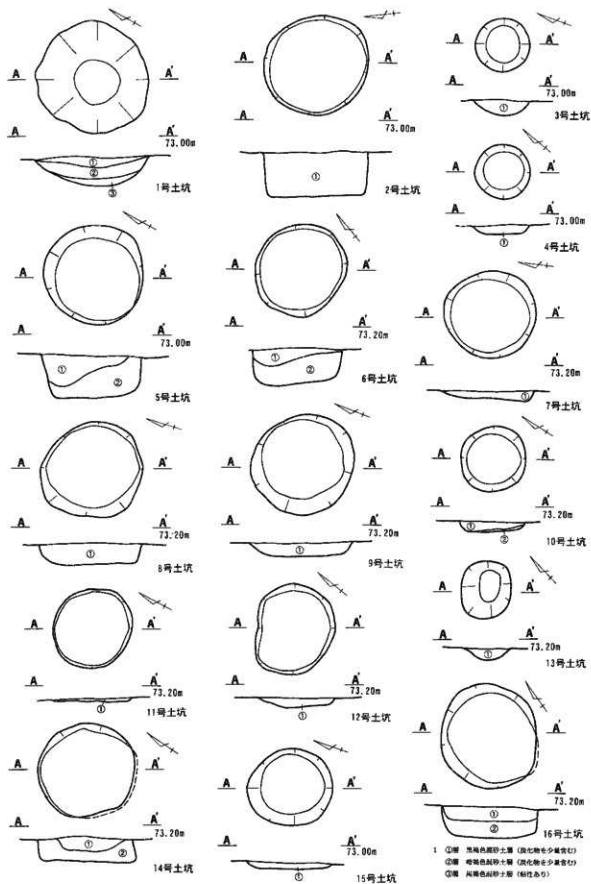
1号土坑と2号～16号土坑とはは検出地点が離れており、検出面も異なっているため、同時期の土坑であるかは不明である（第20図）。

第9表 土坑計測表②

遺構番号	グリッド	層位	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
1号土坑	K-22	I層	円形	122	110	32	
2号土坑	I-21	Ⅲ層	円形	115	104	48	
3号土坑	H-21	Ⅲ層	円形	58	56	18	
4号土坑	H-21	Ⅲ層	円形	60	58	11	
5号土坑	H-21	Ⅲ層	円形	109	104	44	
6号土坑	G-21	Ⅲ層	円形	102	92	38	
7号土坑	G-21	Ⅲ層	円形	98	94	12	
8号土坑	G-22	Ⅲ層	円形	112	98	22	
9号土坑	G-22	Ⅲ層	円形	111	104	14	
10号土坑	G-22	Ⅲ層	円形	73	68	11	
11号土坑	F-22	Ⅲ層	円形	92	82	4	
12号土坑	F-22	Ⅲ層	楕円形	98	92	11	
13号土坑	F-22	Ⅲ層	楕円形	63	51	12	
14号土坑	F-21	Ⅲ層	円形	102	100	28	
15号土坑	H-20	Ⅲ層	円形	90	82	8	
16号土坑	H-22	Ⅲ層	円形	115	100	32	



第19圖 土坑分布圖



第20圖 土坑実測図(2)

第V章 ま と め

弥生時代について

前期末の住居跡を1軒検出した。検出面が砂地であるため住居のプラン確認は大変難しく、サブトレンチによる土層観察によって住居のプランを確定した。住居中央の炉跡は、検出面から5cm程掘り下げたところで赤化した硬化面に達した。掘り方調査で浅いビットを11基検出したが、住居の柱穴を決定することはできなかった。1号住居跡から東側に3m離れたところより遺物が集中して出土した。土器と多量の黒曜石剥片と炭化物が集中して分布する様子は1号住居跡の検出状況と似ており、同様に住居跡であった可能性が考えられる。

土器は殆どが甕形土器で、完形に復元できるものはなかったが、いずれも中部高地の氷式の流れを引く弥生時代前期末の土器群である。これら土器の特徴には西日本的な要素は少なく、神奈川県山間部で出土する土器と胎土などが非常に似通っており¹¹⁾、長野県刈谷原遺跡、神奈川県堂山遺跡、神奈川県北原（No.9）遺跡出土の土器に類例が見られる。

同時期の遺構について、神奈川県北原（No.9）遺跡で焼土跡19基が集中して発見されている。焼土跡の周りからは土器や石器類が多数出土しているが、焼土跡に伴うビット類は検出されておらず、焼土の堆積も厚くないことから、定住ではなく狩猟や移動の際の一時的なキャンプ地と考えられている¹²⁾。今回の調査では1号住居跡、SX03、04から大量の黒曜石剥片が出土している。これらの多くが押圧剥離の際に生じる貝殻状の剥片であったことから、この場で石器製作を行ったことが推測される¹³⁾。しかし、1号住居跡は砂地に造られていること、柱穴が浅いこと、焼土の堆積が薄いことから定住は考えにくい。

弥生時代の遺物の殆どが調査区北西部からの出土であった。前回の調査対象範囲からは弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。今回の調査区内でも弥生時代包含層（IV層）は中央部を流れる河道跡1で浸食されており、分布範囲は限られた狭い範囲であった。

近隣の出土例では本遺跡から南西方向へ200m程離れた工場建設現場より、条痕文土器と遠賀川系土器が出土している。工事中に偶然発見されたため遺構は確認されていないが、黄瀬川の古い河岸段丘上と考えられる礫層からの出土である¹⁴⁾。また長久保城址の調査で数点の弥生土器片が出土しているが、詳しいことは不明である¹⁵⁾。

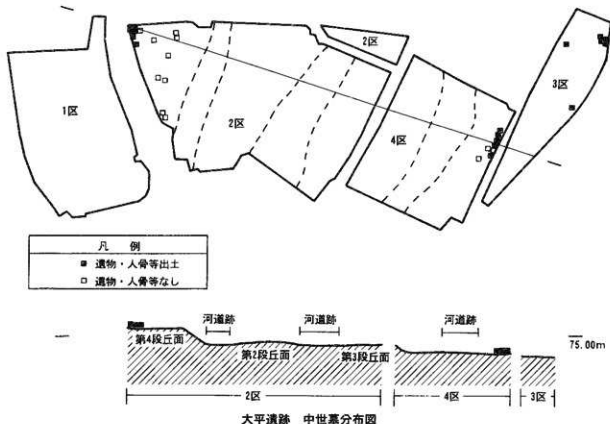
前期末の遺構・遺物共に当地域での検出例は極めて少なく、今回検出した遺構・遺物は貴重な資料である。この時期については不明な点が多く、今後の資料の増加が望まれるところである。

1号住居跡出土炭化物を放射性炭素年代測定し、その結果は付編として掲載した。

中世墓について

調査区の東北隅に広がる砂礫層上面で、8基の中世墓を検出した。遺構の確認は遺物の出土を第一の手がかりとしたため、墓の上部構造について明確に捉えることができなかった。中世墓の時期は出土したかわらけから15世紀後半～16世紀に属する。

中世墓については、木村弘之氏が一の谷墳墓群遺跡の調査結果をもとに行った分類を参考にした¹⁶⁾。中世墓には①盛土によって塚を築く塚墓、②コの字形の溝で区画したコの字形区画墓、③土坑墓（土葬墓）、④石を集積した集石墓、⑤地下式墳、⑥墓標をもつ墓、の6種類があり、このうち、土坑墓と集石墓が一般的に見られる形態で、大平遺跡の中世墓は集石墓に分類される。同氏は集石墓を、Ⅰ類（緑石があり、平面形が方形又は長方形）、Ⅱ類（緑石なし、平面形が方形又は長方形）、Ⅲ類（緑石はなく、平面形は不整形で石が集積しただけのもの）、Ⅳ類（骨蔵器を埋納したもの）、Ⅴ類（骨葬骨を埋納し



たもの。)の5形態に分類されている。大平遺跡の中世墓はⅢ類又はⅤ類に分類されると思われる、これは前回調査の結果と同様である。

今回検出した中世墓は2・3基が連接、または近接して営まれていた。遺物や小穴の周辺には30～50cm大の大形の礫が円形または楕円形に巡っている様子が観察できたので、これを墓の推定範囲とした。

2号墓、3号墓では30～40cm大の礫の近くにかわけが置かれており、かわらけの下には小穴が掘られていた。小穴を掘り火葬骨を納め、上にかわけを供えたようである。上部構造は木村氏分類のⅢ類のように集石を積むのか、Ⅴ類のように骨を納めただけなのかは判らなかつた。3号墓のように礫にかわけを立てかけて固く例は、前回調査の3区でも1基が検出されている。

残存状況の最も良い5号墓は、集石と思われる礫を除くと50×50cmの小穴があり、かわらけや軽石が出土した。小穴の北東隅に径20cmの浅い掘込みが掘られていた。かわらけや軽石の出土した真下に当たる位置であり、火葬骨を納めた場所であったかもしれない。

埋葬の方法は竹藏器の使用や小穴内の壁を石で囲むような施設を造らない、浅い素掘りの円形小穴に火葬骨の一部を納めた簡単なものが主体だったようである。大平遺跡の中世墓は、集石墓の変遷の中でも最終的な形態を呈していると言える。

遺物は副葬品としての銭貨と供献用のかわらけ等が出土している。

1号墓で見られた銭貨の副葬は銭の単位「疋」を意識しており、生前の財産の一部を副葬した可能性が考えられた⁷⁾。また、5号墓から出土した軽石については、菟山町御所之内遺跡で用途不明の軽石が出土する例から、集落で使われていたものが副葬されたのではないかと考えられる⁸⁾。

前回調査では2-1区の第1段丘上と、3区で集石墓が発見されている。2-1区の最も北側に位置する第1段丘面で22基の中世墓が検出された。このうち調査区北壁際に分布する9基から、人骨や歯牙が出土している。9基の集石墓は2・3基ずつ連接又は近接して営まれている。2-1区検出の集石墓

は大形の礫を楕円形に並べ、集石の下には平而形楕円形の土坑が掘られていた。土坑は大きく分けて長軸が100cm以上のものと50cm前後のもの2種類がある。覆土には火葬骨、歯牙、炭化物が含まれ、かわらけや銭貨が出土している。3区では遺構の検出は調査区東側に偏っており、今回調査した4区に隣接する西側からは検出されていない。3基の中世墓と火葬施設1基が近接して造られていた。このうちの2基は長径50cm程の小穴で、覆土から火葬骨や歯牙は出土していない。他の1基は長径100cm程の土坑から火葬骨が出土しており、2-1区の集石墓と類似している。

前回の調査範囲と今回調査した4区での中世墓の分布から、2-1区北側、4区、3区の大きく3つのグループを想定した。いずれのグループからも15世紀後半～16世紀に属する在地系のかかわりが出土している。2-1区、4区では段丘上に2・3基が連続・近接して帯状に分布するという共通点が見られたが、3区では火葬施設と集石墓が近接して造られていた。2-1区の中世墓は集石の下に長径50～100cm程の大形の土坑が掘られている例が多く、覆土からは炭化物・人骨が出土している。一方、4区の中世墓は上部構造が不明であるが、埋葬主体は長径50cm程の小穴で、覆土から人骨等は出土しなかった。3区では2つのタイプが1つのグループ内に見られた。このように、遺物からはほぼ同時期と考えられる中世墓だが、グループによって埋葬主体の規模や方法に類似点と相違点が見られた。

今回検出した墓はわずか8基であるが、他の遺跡例を見ても、副葬品を出土する墓が全体の中で占める割合は低く、多くの中世墓は遺物を伴っていない。実際は穴を掘らず、石の上や土の上に骨を置いただけのより簡単な埋葬も多く行われていた⁶⁾。検出できなかったもの、誤って削平してしまったもの等を含め、大平遺跡には非常に多くの墓が存在していた様子が推測される。

6) 箱根町教育委員会 谷口 肇氏のご教示による。

7) 谷川 肇 1994年「縄文時代晩期終末～弥生時代初頃の遺構・遺物」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』

8) 当研究所 菅原千賀子調査研究員のご教示による。

9) 小野貞一 1970年「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古』第10号

10) 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 静岡県長泉町 1982年

『長久保城址（八幡曲輪・上野南・大木塚） 大平遺跡』

11) 木村弘之 1997年「中世墓の種類と変遷」『静岡県における中世墓』

12) 銭貨については、当研究所岩名建太郎調査研究員のご教示による。

13) 塩山町教育委員会 池谷初恵氏のご教示による。

14) 静岡県教育委員会 中島郁夫氏のご教示による。

参考文献

1. 愛知県考古学談話会 1985年『(条底文系土器)文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—資料編1』
2. 警田市教育委員会 1993年『一の谷中世墳墓群遺跡』
3. 太田 保・設楽博巳 1983年『刈谷原遺跡』『長野県史 考古資料編] 全一卷(3)』
4. 小野真一 1970年『駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器』『駿豆考古] 第10号』
5. 神奈川県埋蔵文化財センター 1994年
『宮ヶ瀬遺跡群IV 北原 (No.9) 遺跡(2) 北原 (No.11) 遺跡』
6. 側かながわ考古学財団 1999年『かながわの遺跡展 弥生の幕あけ』
7. 側かながわ考古学財団 側神奈川県教育福祉振興会 2000年
『公開セミナー 弥生時代の幕開け—縄文から弥生への移行期の様相を探る—記録集』
8. 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 静岡県長泉町 1982年
『長久保城址 (八幡曲輪・上野南・大木塚) 大平遺跡』
9. 静岡県 1990年『静岡県史 考古編III』
10. 静岡県考古学会 1997年『静岡県における中世墓』
11. 側静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998年『大平遺跡』
12. 側静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998年『御殿川遺跡群IV 鶴喰広田・中手丸遺跡』
13. 設楽博巳 1995年『東日本における弥生時代の始まり』
『展望 考古学—考古学研究会40周年記念論集—』
14. 谷口 肇 1990年『「堂山式土器」の再検討』『神奈川考古] 第26号』
15. 谷口 肇 1996年『神奈川県地域 (弥生前期～中期中葉)』
『YAY! 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』
16. 長泉町郷土誌増補版編さん委員会 1992年 『長泉町史 上巻』
17. 平野和男 1991年『静岡県内の中世墳墓のあり方』『歴史手帖] 19巻11号』
18. 藤澤典彦 1989年『中世葬地ノート』『佛教藝術] 182号』
19. 藤澤典彦 1990年『墓地景観の変遷とその背景—石組葬を中心として—』『日本史研究] 330号』
20. 水藤 真 1991年『中世の葬送・墓制』吉川弘文館

謝 辞

大平遺跡の調査・資料整理にあたって、多くの方からご指導・ご教示いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。(敬称略 五十音順)

池谷初志 加藤勝仁 佐藤由紀男 設楽博巳 谷口 肇 中鉢賢治 富永樹之 中沢道彦 中嶋郁夫
廣瀬高文 松井一明

調査参加者

加藤直美 柴田美佐子 杉山陽子 峯松祥子

付編 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

大平道跡1号住居跡から出土した炭化物試料1点の放射性炭素年代をAMS法にて測定した。測定結果と暦年代較正して得られた結果は表1に記載した。

放射性炭素年代測定について

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

なお、 ^{14}C 年代値(yrBP)の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。試料の ^{14}C 計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の ^{14}C 計数率の比が $^{14}\text{C}_{\text{Sample}}/^{14}\text{C}_{\text{Modern}} \geq 1$ の時はModernと表記する。

同位体分別効果の補正について

表1に記載した $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値は、PDB標準試料の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比($(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}=0.0112372$)を標準値として、その標準値からのずれを千分率で示し、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比($(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{Sample}}$)を質量分析計で測定して、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} = [(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{Sample}} / (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}}] \times 1000$ の計算式によって算出した。試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を -25.0% に規格化することにより、測定された試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を用いて ^{14}C 濃度を補正し、これを用いて ^{14}C 年代を算出した。したがって、表1に記載した ^{14}C 年代は同位体分別効果による測定誤差を補正した年代である。

暦年代較正について

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5,730 \pm 40年)を較正し、より正確に真の年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の腐炭の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。較正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program * CALIB rev. 4.3 [Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98) Stuiver et al., 1998a), Radiocarbon 40, p.1041-1083]を使用した。なお、暦年代較正値は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、真の年代である可能性が最も高いことを示す。また、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲は確率分布を用いて算出した暦年代範囲であり、その範囲内に真の年代が入る可能性が高いことを示す。 1σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が68%であることを示す。 1σ 暦年代範囲のProbabilityは、68%のうちで、さらに特定の 1σ 暦年代範囲に入る確率を示す。同様に、 2σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差の2倍($\pm 2\sigma$)に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が95%であることを示す。 2σ 暦年代範囲のProbabilityは、95%のうちで、さらに特定の 2σ 暦年代範囲に入る確率を示す。

校正曲線は ^{14}C 濃度の変動のためデコボコしており、そのため ^{14}C 年代値に対応する暦年代校正値、または ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲が複数存在する場合があるが、暦年代校正値はいずれも等しく真の年代である可能性があり、1 σ 暦年代範囲はいずれも68%、2 σ 暦年代範囲はいずれも95%の確率で、さらにProbabilityに示された確率で真の年代が入る。

暦年代校正は約二万年前からAD1950年までが有効であり、該当しないものについては暦年代校正値を*****またはModernと表記し、1 σ 暦年代範囲および2 σ 暦年代範囲を*****と表記する。また、cal AD1955*は核実験後の年代を指し、Modernを意味する。ただし、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。

表1 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号 (測定方法)	試料データ	$\delta^{14}\text{C}_{\text{perm}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代		
				暦年代校正値	1 σ 暦年代範囲 (Probability)	2 σ 暦年代範囲 (Probability)
FLD-100P (AMS)	樹皮粉 資料№1	-24.5	2350 \pm 25	cal BC 400	cal BC 410-390 (100%)	cal BC 515-460 (15.2%) cal BC 415-380 (77.5%)

備考

ModernはAD1950年以降の新しい年代を指す。yrBPはAD1950年から過去へ遡った年代を意味する。calは校正した暦年代を意味し、実年代との混同を防ぐためにつけられる。また、Probabilityが10%未満の1 σ 年代範囲および2 σ 年代範囲については記載を省略した。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

写 真 图 版



1 遺跡遺景（南より）



2 調査区全景（北より）



1 1号住居跡全景(東より)



2 1号住居跡遺物出土状況(1)(西より)



3 1号住居跡炉跡土層堆積状況(南より)



4 1号住居跡遺物出土状況(2)(南より)



1 1号墓検出状況（北より）



2 1号墓遺物出土状況（東より）



1 2号墓検出状況(北より)



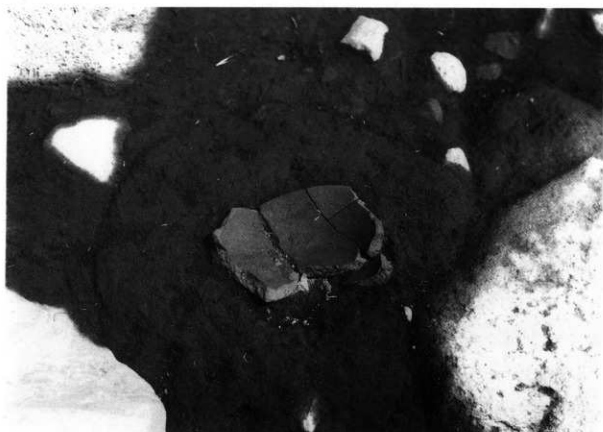
2 2号墓遺物出土状況[1](南より)



3 2号墓遺物出土状況[2](北より)



1 3号墓・4号墓検出状況（北より）



2 3号墓遺物出土状況（北より）



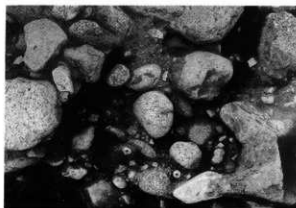
1 5号墓検出状況(北より)



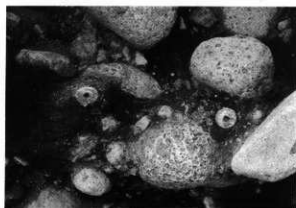
2 5号墓土層堆積状況(北より)



3 5号墓遺物出土状況(1)(北より)



4 5号墓遺物出土状況(2)(南より)



5 5号墓遺物出土状況(3)(南より)



1 6号墓検出状況（南より）



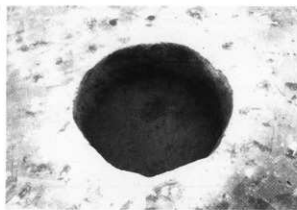
2 8号墓検出状況（西より）



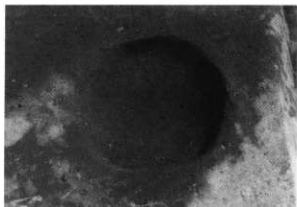
1 土坑 (SF 3~16) 検出状況 (西より)



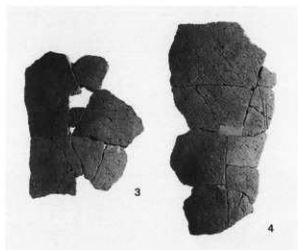
2 土坑 (SF17・19~21) 検出状況 (東より)



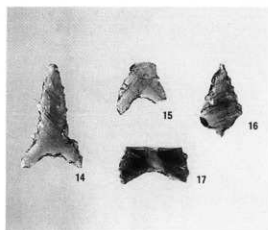
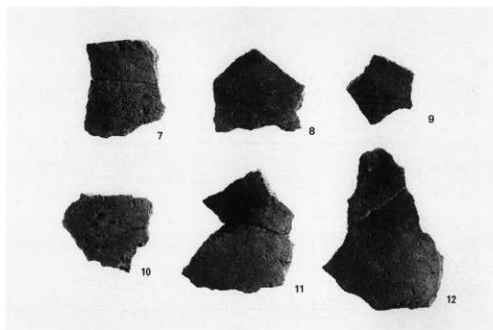
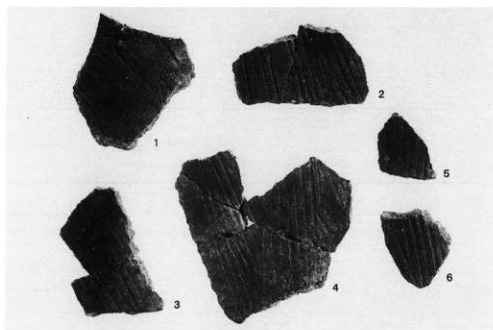
3 2号土坑検出状況 (西より)



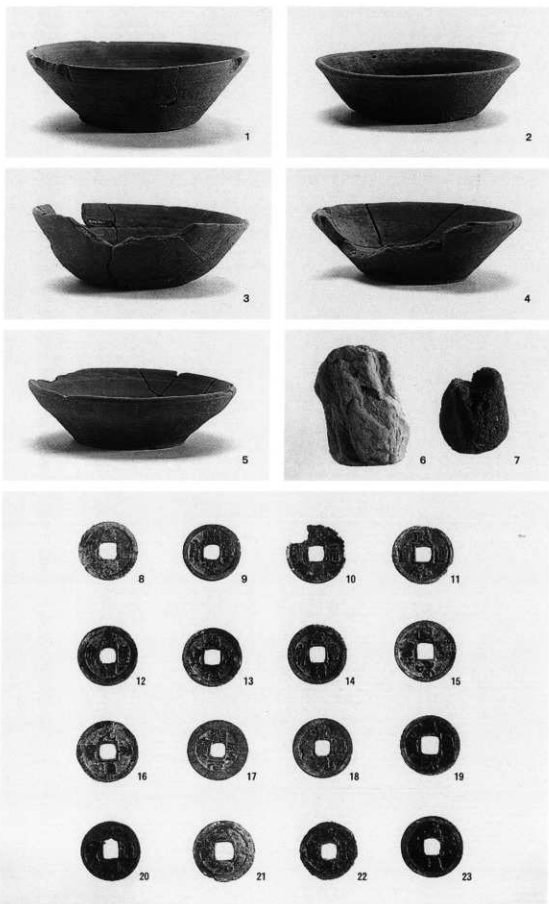
4 25号土坑検出状況 (西より)



1 弥生時代遺物(1)



1 弥生時代遺物②



1 中世遺物

報告書抄録

ふりがな	おおだいらいせき に							
書名	大平遺跡Ⅱ							
副書名	平成12年度東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第129集							
編集者名	佐野暢彦 水上綾子							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261(代)							
発行年月日	西暦2001年9月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおだいら 大平	しずおかけん 静岡県 すんとうくん 駿東郡 ながいぞみちょう 長泉町 みなみいっしき 南一色	22342		35° 8′ 48″	138° 53′ 58″	2000年4月 ～ 2000年6月	4,200 m ²	東駿河湾 環状道路 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おおだいらいせき 大平遺跡	集落	弥生 前期末	住居跡	弥生土器 石鏃 石皿				
	墓	中世	集石墓 土坑	かわらけ 銭貨 軽石				

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第129集

大 平 遺 跡 Ⅱ

平成12年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年9月28日

発行所 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL(054)262-4261(内)

印刷所 みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL(0559)21-1839(内)